



第2回 「クロッシング」

川崎 二三彦
(子どもの虹情報研修センター)

『対人援助学マガジン』創刊号は、届いてから全文をプリントアウトしてアットランダムにいくつか読みました。皆さん、なかなか熱が入っていますね。私の連載は、雑誌に彩りを添えるぐらいのつもりで書いているので、何か申し訳ない気になります。それにしても、せっかくの対人援助学会メーリングリストにマガジンの感想が投稿されるかと思いきや、全く見かけませんでしたね。自分のことは棚に上げて、少し残念でした。さて、今回選んだ映画はあまりポピュラーなものではありません。ご覧になった方、ありますか。それとも、「ベスト・キッド」あたりを紹介したほうがよかった？

土曜日の午後、わざわざ JR 川崎駅まで足を運んで観た映画。ところが客席総数は 844 席だということに入場者は 10 数人。北朝鮮からの脱北者を描いた韓国映画だから、やはりこんな暗い作品は入らないのかなと思いつつ、誰に気兼ねするでもなく座席3つ分を独り占めして、それでもまだ足りないと言わんばかりに足を広げて座らせてもらった。

ただし観た人の評判は総じてよい。

「あまりの衝撃に涙するばかりで無力な自分を痛感」

「ものすごく痛くて救いようのない話だけど、これが現実なんだろうな」

「クロッシングを観ました。本当に久しぶりに涙腺が完全決壊。映画では初めてと思われる、嗚咽までもらしました。最初から最後まで、涙、涙、涙...の2時間でした」

「泣けるという人が多いみたいだけど、泣くことはできなかった。なんともやるせない重い余韻」

「映画クロッシングを見た。...もし彼らを救いにいく義勇軍の募集があれば手をあげるだろう」

最近、映画を観たら帰宅後ツイッターで検索し、同じ日に同じ映画を日本のどこかで観た人のつぶやきをチェックすることにしているのだけれど、こんな声があふれかえっていた。

サッカー選手だった夫が病に伏す妻のため、治療薬を手に入れようと脱北する物語。だが中国に渡っても、現在の中朝の政情からしてたやすく目的を達成できるはずもない。中国政府は脱北者の増加をいやがり、種々の規制を強化しているからである。さて、映画では北朝鮮に残された妻が死に、11歳の一人息子が孤児となる。



「ウウム、こういう場合、北朝鮮ではどうするのかな？」こんなシーンになると、ついつい児童相談所の児童福祉司時代のことが思い出され、泣いてるどころではなくなってしまふ。何しろソーシャルワーカーは、所与の条件がいかに劣悪であっても、その中で本能的に何らかの解決策を見出そうと思考するものなのである。ところが北朝鮮では、「保護者のいない児童」であっても、児童福祉機関が登場する気配はない。そのまま放置された11歳の息子は、父と会うのだと固く決意し、村や町をさまよひ、ついには脱北者の子として子ども向け？強制収容所に入れられてしまふ。

北朝鮮は今とても貧しい。しかし日本だって戦前の貧しさならば勝るとも劣らない厳しさだった。事実、大量の貰い子殺し事件が繰り返され、貧しさゆえの親子心中だって枚挙にいとまがなかったのだから。ただし、当時の日本と現在の北朝鮮で明らかに違うところは、少なくとも日本では、そうした事態を憂い、それを世に問う人が、少数ながらいたことだ。三田谷啓や賀川豊彦がその一例だ。

だからこそ、貧しさという点では共通していても、現在の北朝鮮の子どもたちは、戦前の日本より一層の困難を抱えている。独裁政治の問題の本質はここにあるのだ...、などと言っている間に話が忘れてしまった。

この映画のクライマックスの1つは、さまざまな援助を得、かるうじて中国に渡った息子と父とが、やっと実現した携帯電話で話す場面だろう。

「お父さん！」

彼がこう呼びかけた後で発した言葉が忘れられない。

「ごめんなさい、お母さんを守れなくて...」

「男の子はお母さんを守れ」と父に言

われていた彼は、自身が辿った想像を絶する苦難や寂しさを訴える前に、どうしてもこう話すしかなかったのである。後は言葉を継ぎ足すこともできずに泣きじゃくる。やはりまだ子ども。

それにしても不思議とすらいえるのは、これほどの過酷な境遇の中で示される純粹に家族を思う父、母、そして息子それぞれの姿だ。私が感動したのは、もしかしたら、日本では失われかけているとすら感じられる彼ら家族の美しさだったのかも知れない。

(鑑賞データ：2010/06/26 チネチッタ 川崎)

